

若馬の調教

これまであらゆるテーマ毎に説明をしてきたが、ここで具体的に「若馬の調教」について説明していきたい。ただし、若馬を調教しようとする者はこれまでの各テーマの理解と技術（経験）が必要であることは言うまでもない。とはいえある程度の知識と技術のある者であれば、誰でもできることである。もちろん最初は失敗も多々あるだろう。しかし、その失敗がその人にとって良い経験となることは間違いなく、その失敗を二度と繰り返さないように心掛けることによって進歩を得ることができる。誰も初めから完璧にできるわけではない。上手な人は数多くの失敗のもとに良い経験を得、それが今日の彼を育てたものと思う。そのためにも初めは良い指導者のもとで正しい知識と技術を身につけることがとても大切である。それによって自分でも馬を調教できるようになる。馬を調教することの楽しさを知ろう！馬を調教することによってより高度な技術が得られるようになるだろう。多くのことを経験することが最終的にはその人の技術となるだろう。

ただし、相手は“生き物”であるだけに、人に接するときと同様の責任感というものが必要となるので、よくその馬を可愛がり、静かにかつ慎重に調教を進めよう。それによってその馬は調教師の要求をよく理解してくるだろう。「馬の調教」は特別なことではない。

調教師の心構え

1. 馬事知識：(馬の心理・飼養管理・馬学・獣医学)
2. 経験：(騎乗技術一最低 L クラス 馬場・障害)
3. 指導：(指導技術一最低 L クラス 馬場・障害)
4. 判断力：(すべてにおける良否の判断)
5. 忍耐力：(根気・責任感)
6. 展望力：(将来への方向づけ)
7. 愛馬心：(馬の気持ちをとらえる)

親睦期 (3~4 才)

我々が入手する馬の年齢は一般的にだいたい 2 才半から 3 才前後、または 4 才前後だろう。日本国内においては、若馬が牧場から育成場または競馬場に入るのはだいたい 2 才半から 3 才前後くらいである。牧場時代は若馬にとって大きな成長期である。この時期に若馬は良い環境のもとでのびのびと育つことが大切である。良い環境とは良い土壌と広さであり、それは良い牧草の源であり、十分な運動（基礎的

体力の養成)が可能であるということである。そして、良い厩舎および飼養管理のもとに安全で健康的な馬に育つことができる。さらに、良い管理者のもとで人間にも慣れ、信頼が生まれる。それによって馬の取り扱い(手入れや引き馬や馬装など)がしやすくなる。そのことが今後の馬の調教においても大切である。

このようにして牧場で健康的にのびのび育った馬は、その後の育成場や競馬場での管理や調教を円滑に進めるもとになる。また、我々はそのような馬を望んでいる。若馬時代の管理はそのような意味においてもとても大切であり、この時期の管理が大きく将来に影響を与える。なぜなら、若馬時代に経験した記憶はかなり長い間、その馬の脳裏に焼き付いているものだからである。特にいやな記憶は長期間残っている。それ故、我々はその時期を大切に扱うべきである。

このようにして若馬は一般的に牧場から育成場または競馬場に入ってくるが、それぞれの施設で行うことは、最初は基本的な動作のしつけである。すなわち、牧場時代と同様の引き馬や手入れや馬装などの順致である。もちろん初めは新しい環境に慣れていないので、2~3日から約1週間ほど馬が落ち着くまで様子を見る。馬が慣れてくると、初めあまり食べなかったエサも食べるようになるし、引き馬や手入れ時にもあまり驚かないで管理者の意志を理解するようになる。このように、調教に入る前に馬が環境やエサや人間に慣れるまたは慣らすことが第一に必要なことである。これはしつけであるが、これもひとつの調教である。

このようにして若馬がすべての物に慣れてきたら、または調教を始められる時期にきたら、初めは調馬索にて運動を始める。調馬索にて両手前静かに常歩・速歩・駈歩できれいに円運動を行うことができるようになると、鞍付け調教に入る。

調馬索作業に入るとき、その前に無口や水勒に慣らしておくことはとても大切である。馬によっては装勒をいやがるものもいるので、静かに慎重に行うべきである。(馬房内が望ましい。なぜなら馬が最も安心できる場所だからである。)これも牧場時代の取り扱いやその後の取り扱いによってやり易くもやりづらくもなるので、前述したような理由でとても大切な事柄である。若馬を怖がらせないようにして行うことが、人間に対する信頼感につながり、その後の取り扱いを円滑にする。

このようにして若馬が調馬索作業に慣れたら鞍付けに入るが、場所は調馬索馬場で行う方が望ましい。なぜなら、初めて若馬が腹を締められたときは、全く今まで経験したことのないことだから、かなりの圧迫感と衝撃を感じるものだからである。そのため、若馬のとり行動として腹を膨らませたり、背を張ったりする。そうすると、ますます腹帯がきつく感じ、馬は驚き、急に前にでたり、ハネたりする。そ

うすると余計苦しいものだから、ますますハネたり、走り出したりする。

このように初めて若馬に腹帯を締めるときは、非常に危険な状況が存在しているので、十分慎重に行うべきである。だから、腹帯を締める前に十分に馬を運動させ、馬が落ち着いたのを見計らって行う方がよい。一般的には初め上腹（細い幅の腹帯）に慣らす。すなわち“だるま”（綿入りのゼッケン）や乗馬用のゼッケンを付けて上腹を締める。この時調教師（調教師1人と助手1～2名）は馬を怖がらせないように、よく馬を愛撫しながらなだめるようにして行う。馬の首や背を撫でたり、軽くたたいたりして馬の緊張感を取り除くと共に、馬の伏態を判断する。その後静かにゼッケンだけを馬の背に置いて、ずらしたり、外してまた置いたり、という具合に様子を見る。もしこの動作に馬が不安を示さないようなら、静かに上腹を置き静かに締める。ただし、初めから強く締めないように注意する。この時、強く締めると馬は驚き、前へ飛び出す。これはその後の作業に必要な以上の警戒心を抱かせるもととなるので注意する。初めは軽く上腹が馬の背と腹に接するぐらいで、まだ金具には通さない。この動作を数回繰り返して大丈夫なようだったら、金具に通し軽く締める。この時馬は腹を少し膨らませるので慎重に行う。そして、馬はまだ動かさない。なぜなら、この時馬が動くと腹帯が十分しまっていないので、すぐゆるんでゼッケンがずれ、最悪の場合は腹帯が腹の後方にずれ大暴れする危険性があるからである。それ故、万一馬が動いても上腹とゼッケンがずれない程度まではその場に馬を立たせておくべきである。

このようにして、馬が動いても腹帯またはゼッケンがずれないまでに、1穴ずつ慎重に腹帯を締める。この作業が完了したらいよいよ馬を前に歩かす訳だが、この際決して走らせないことが大切である。ここが大きな関門であるが、この時静かに常歩で行進させることができたなら、かなり順調な出発といえるだろう。馬によっては、第1日目は停止の状態の上腹とゼッケンを軽く締めるだけで終わりとするときもあれば、常歩発進まで行うことができる場合もある。この時期は決して先を急ぐ必要はなく、1日や2日ほど余分にこの作業をするほうがその後の作業がし易い。この時期を急いで失敗することのほうがむしろ危険なので、十分時間をかけてあげる方がよい。

このようにして、若馬がゼッケンを上腹で締めて常歩から停止、そして再び常歩発進ができれば、静かに速歩発進を試みる。とにかく、すべての作業中馬を驚かせないことと、決してハネさせないことが大切である。ある時には調教師ひとりのみで行うほうがやり易い場合もあれば、助手を1～2名そばで補助させる方がやり易い場合もある。あくまでもその馬または状況によって、調教師がよく判断することが大切である。

そのほか、必要があれば作業後馬房内においても上腹を締めておくことも可能である（2～3時間程度）。特に、上腹になかなか慣れない馬などには効果的である。但し、道具が馬房内でどこかの場所にひっか

からないよう注意する。

このようにして上腹とゼッケンに慣れたら、いよいよ鞍を付ける。初めは鎧を外しておいた方がよい。この時の鞍は調教鞍か、普通の乗馬鞍でよい。動作はすでに述べた通りだが、いつでも、特に新しいことを行う場合は慎重に行う。あくまでも馬にある程度納得させながら行うべきである。特に鞍はそれまでのゼッケンに比べ、重く、アオリ革も少しバタバタするので、鞍を馬の背に置くときはドシンと置かずに、音をさせないように静かに行う。

また、初めて馬の背に鞍を置く場合（馬の左側から）、腹帯は外しておく。鞍を置いた後、初め鞍の右側に腹帯を取り付ける。この時、必要であれば助手（経験者）に馬を持たせておく。その後馬の左側に戻り、静かに腹帯を締める。この時の動作も慎重に1穴ずつ徐々に締める。そして馬が動いても鞍がずれない程度に腹帯を締めたら、調教師は助手に静かに馬を前へ引かせる。一方調教師は後方から静かに馬を追い出す。但し、必ず常歩に発進させる。常歩への第1歩で馬は多少腹に圧迫感を感じ、そのために馬は止まるか、少し立ち上がるか、または走り出すなどの行動にでるものだからである。たとえどのような行動に馬がであろうとも、助手は常歩に保ち、調教師は助手によく指示をしながらも馬を前へ追い出す。決して停止または立ち上がらせない。このようにして馬が常歩から停止、そして再び常歩発進ができたなら、その日はそこで完了するか、馬の落ち着き状態によっては速歩発進をして様子を見る。但し、絶えず馬の動作に注意を払い、安全にかつ確実に馬に鞍付けの目的を理解させる。このようにして若馬が背に鞍を付けて調馬索作業において常歩・速歩・駈歩を両手前静かに行えるようになったら、いよいよ騎乗することができる。

初めて騎乗する人間は、経験のある比較的体重の軽い若い騎手が望ましい。そして調教師は調馬索を持ち、馬の誘導をする。初め、騎手は助手の補助のもとで静かに乗馬下馬を繰り返す。この時の乗馬下馬は、鞍の上に腹をのせるまでの動作である。まだ全面的にはまたがらない。この乗馬下馬を何回か繰り返し行って馬が動かないようなら、初め鞍に腹をのせた状態で常歩に移る。このような動作は万一馬が予期せぬ行動に移ってもすぐ下馬できるためである。このようにして常歩から停止、そして再び常歩発進を繰り返し、大丈夫と判断したら、速歩発進に入る。そして速歩から常歩、そして再び速歩への発進が円滑にできたなら、その日はそれで終了し、翌日再び同じ作業を行う。

このようにして、これまでの作業において馬が不安がらずに静かに行えるようになったら、いよいよ騎乗することになる。調教師または助手は初め、調馬索または引き手を水勒に付ける。調馬索作業のかたちで騎乗する動作に入ったり、逆に引き馬の状態から騎乗する動作に入ったりする場合がある。これはあくまでも馬の状態によるのでどちらの方法がよいとは言えない。あくまでもやり易いかたちで行う方

が望ましい。ただ基本的には調馬索作業のかたちで騎乗する方が一般的である。

このようにしていよいよ単騎または誘導馬の後について、騎手は馬の背にまたがり騎乗することになる。この時の騎手は軽減姿勢または前傾姿勢をとる。初めは若馬は背の負担を嫌うので決して騎手は鞍に座り込まない。もし鞍に座り込むと、馬は背に苦痛を感じ、そのため腹を膨らませてよけい腹帯を気にして馬体を硬くし、急に飛び出したり、ハネたり、止まってしまう。そうでなくても馬にとってはすべて未経験なので、騎手の柔らかさとバランスが必要とされる。それ故、騎手は慎重に上手に馬を前進させる。必要に応じて誘導馬の後につくか、後方に助手を置き、静かに馬を前へ追わせる。このようにして、初め常歩行進から入り馬の落ち着きを見計らって速歩に入る。この時、決して手綱を強く引かないように注意する。若馬は手綱を引かれるとかえって前に出たり、急に止まってしまう。あくまでも騎手の柔軟でかつ良いバランスと拳の柔らかさが必要である。この時期は軽く馬の口とのコンタクトを感じるほどの手綱の張り、脚およびムチによる推進扶助が大切である。なぜなら、この時期はまだ若馬は真つぐ歩くことができず、むしろ首を使って動きのバランスを得るので、強く依倚を求めないし、拍車は決して使用してはならない。それよりも、ムチ（70～110cm）を上手に使いながらよく馬を前へ歩かすことが大切である。

このようにして馬場を大きく、すなわち蹄跡行進をする。そして両手前を常歩と速歩にて行う。この時の騎乗時間はだいたい20～30分位とする。このような作業を繰り返すことによって、馬が馬装にも慣れ、騎手の負重や扶助にも慣れてきたら、約30～40分位騎乗することができる。あくまでも馬の状態に応じて判断する。このようにして若馬が蹄跡行進や斜手前変換そして大きな輪乗りまたは輪乗り変換ができるようになるまで、鞍付けから約3週間から4週間位かかる。騎乗下で若馬が上記のような図形騎乗ができるようになるということは、若馬がバランスを得て歩けるようになってきたということであり、すなわち、歩調と緊張の緩和（柔軟性）が備わってきたということである。すべては、馬の状態、調教師の技能程度によって、その調教日数または馬の理解が決まる。

このような事柄が育成場または競馬場で牧場からきた若馬たちに順致されていく訳だが、中には牧場から直接乗馬クラブにくる馬もいる。一般的には競走馬の場合2才半から3才位に鞍付け作業に入るが、乗用馬の場合は、できることなら3才半から4才位から鞍付けまたは騎乗に入る方が望ましい、なぜなら、2才半から3才位はまだ馬の成長期にあり、背もまだ弱く、化骨もしていないからである。それ故、我々乗馬の場合は3才半から4才位に鞍付けまたは騎乗に入るのである。ただ、我々が入手する馬は一般的に競走馬からの転用馬が多く、一般の人達が入手する競走馬はすでに約4才以上の馬が多い。そのため、そのような馬たちはすでに鞍付けおよび騎乗が済んでいるので、一般的には馬の健康状態が良ければ、その期間の作業を省略して進むことができる。但し、一般の人達はこのような牧場時代や鞍付け

の時期をあまり経験していない。それ故、あえてこの時期の馬の調教内容を説明してみたが、この時期が一番重要でかつ危険性が多いので、くれぐれも慎重に行う必要がある。人馬の事故には最大限注意を払うべきである。また、全くの健康体の馬を我々が入手することは少なく、特に競走馬からの転用馬の多くはどこかしら故障をしているケースが多い。それ故、よくその馬の転用を図らねばならない。しかし最近では、以前に較べ故障程度も軽くなり、数カ月から半年位の休養期間をみれば騎乗可能な馬が多くなっている。もちろんすぐ騎乗できるのもいれば、一年以上も休養させなければならない馬も中にはいる。いずれにしても、よく馬の故障程度を判断し、できることなら乗用馬に適した性格と体型と機能を備えた、無故障または故障程度の少ない馬を選択する方が望ましい。その方が経済的であり、確実性がある。馬の選択は馬の調教における第一歩である。

親睦期の主な目標

1. 人馬間の信頼獲得
2. 歩調と緊張の緩和の理解
3. やさしい図形騎乗
4. 速歩における前方下方への頭頸の伸展
5. 常歩への移行の際、すみやかに手綱を徐々に拳からすべらせるようにして全面的に手綱を伸ばすこと。

推進力の展開期

若馬がよく人間の取り扱いに慣れ、装勒、装鞍、調馬索作業、騎乗下での行進などができるようになることが、これからの作業においての前提条件となる（予備調教）。今後はいよいよ本格的な初期調教に入っていくことになるが、決して調教を急いではいけない。なぜなら、馬の成長期というのは、一般的に軽種の場合は約6才位までかかり、中間種の場合は約7才位までかかるからである。この期間若馬は成長途上にあり、精神的にはまだ幼稚であり、また肉体的には骨格も筋力も十分ではない。そのため、無理な調教は馬の心身に大きな負担をかけるもととなり、若馬の調教には十分時間をかけるべきである。馬の精神面と肉体面の双方をよく見極めて調教を進めることが必要である。それによって健康的でかつ従順な馬を育てることができる。

さて、この時期においては、若馬は騎手を背に受けてかなりの運動バランスを得て行進できるようになっていることが大切である。すなわち、常歩・速歩・駈歩で簡単な図形運動（蹄跡行進・斜手前変換・輪乗りなど）ができることである。但し、ここまでの時期においては、騎手は馬の頭頸を強く規制するほどに依倚（ハミ受け）を求めてはならず、軽く馬の口との連絡（コンクト）を保つ程度の手綱の張

りにとどめておく。それによって馬は首を使って歩くことができる。それが若馬の運動バランス（騎乗下での）を得る最大の道であり、とても大切なことである。もし、逆にこの時期に強く依倚を求めたなら、若馬は口に強い抵抗を感じ、馬体（特に背）を硬くし、首を使って歩くことができなくなる。馬というものは首でバランスをとって歩くものなので、くれぐれもこのことは注意すべきである。このことは生涯騎乗する者は注意または心得ておくべきである。それによって馬は調教の初期より馬体の力を抜いて背と首を使って歩くことを理解する。それが騎手の扶助に対し従順な馬に育てることにつながる。なお若馬の騎乗時において、速歩においては軽速歩を主に、そして駈歩においては軽減姿勢または前傾姿勢を主に多用するべきである。それによって馬の背の負担を軽減することができる。あくまでも馬の背の柔らかさを感じたときのみ軽く尻をつける。但し、決して強く座り込まないように注意する。このように予備調教なり初期調教なりを慎重に行うだけで、馬は自らバランスよく歩き（歩調）、馬体の力をも抜いて（緊張の緩和）歩くようになる。そうすると、自ずと馬は騎手の拳に対して柔らかく依倚してくるようになる。すなわち、初めのうちは多少馬は騎手の拳に対して抵抗を示していることもあるが、それをあえて手綱を引かないように、ただ馬の口とのコンタクトを得ておく程度に騎手は拳を保ちながらも、よく推進することによって、次第に馬はハミをうけてくるようになる（依倚）。このように馬が騎手の拳に対して譲ってきたとき（口を軽くする）、すかさず騎手は外方に支点を得ながらも内方拳をわずかに譲る（弛める）。但し、この時の内方拳の譲りは手綱がたるむほどではなく、あくまでも馬の内方の口とのコンタクトを感じている中での譲りである。それは時としてわずかな指のゆるめだけでよい場合もあれば、拳または肘の譲りの場合もある。また、拳の静定は固定ではなく、いついかなる場合でも絶えず馬の口の動きに対してついていくべきである。その動作が静かにできることによって絶えず馬の動きに対して拳を一定のコンタクトを得た状態で静定しておくことが可能である。この拳の静定動作が保てることと、その馬の伏態に応じた推進を適確に行うことによって、馬はハミを静かにかつ柔らかく受けるようになる。そうするとますます拳の静定が安定してくる。このように騎手の扶助に従って馬が歩くことができれば、自ずと基本的な図形騎乗が可能となる。また、当然そのような騎乗時には多かれ少なかれ、騎手の減却扶助動作も含まれているわけで、馬もその動作を受け入れて歩いていることだろう。但し、この減却動作は非常に慎重に行われるべきである。特に若馬の初期調教時には騎手の拳の柔らかさが大切である。それぞれの運動そのものは無難にできても移行はとても難しく、特に若馬の場合状態をくずしやすい。これは騎手の扶助のミスもあれば、馬自身の運動バランスの不安定さからも生じやすいので、くれぐれも丁寧に動作をするべきである。この時期の騎乗はとても難しく、慎重な動作を騎手は要求されるが、これらを通して騎手は大変多くのそして重要なポイントを得ることができると共に、彼の感覚養成に大変役立つことであろう。この辺が“調教は難しいが楽しい”という所以だろう。そのほかは、図形騎乗を通しての三種の歩法変換や歩度変換の練習によって、馬はだんだん正確な運動を実施できるようになってくる。

このようにして若馬が正確に図形騎乗を実施できるようになると「A クラスの馬場経路」を踏むことができるようになる。A クラスの馬場経路は日本国内の場合、日馬連制定の「第1級課目」と「第2級課目」に相当する。「各クラス別の運動課目」(p 参照)を見れば、馬場経路に使用されるほとんどの運動課目が必要運動課目として含まれている。馬場馬に限らず障害馬や総合馬の場合も、すべては最低この A クラスの馬場運動課目を正確にできるべきである。それによって馬場馬は正確な馬場経路を実施でき、障害馬や総合馬などもよく騎手の扶助に従って障害飛越や野外走行ができるようになる。それによって馬は誘導がしやすくなり、減点も避けることができる。

それ故、若馬の初期調教における大きな第一目標は正確な「A クラスの馬場経路」を実施できるようにすることである。若馬がきれいに「A クラスの馬場経路」を実施できるようになったら、いよいよ馬に「収縮」を求められるようになる。

推進力の展開期の目標

1. 三種の歩法内における頭頸の伸展
2. 安定した依倚の養成
3. 後肢の活気ある場体下への踏み込み
4. 背の柔軟性と弾力性の養成
5. 歩度の伸縮（弾発の養成）
6. 「訓練段階」6点の養成
7. 筋力と体力の強化

負重力の展開期

この段階になったら、若馬はもう乗用馬としての経験も積んで、年令的には約5～6才（3才半～4才位に騎乗開始したとして）になっているだろう。だから、まったくの若馬ではないが、一方まったくの古馬でもない。まさに途上期にある訳で、さらにこれから先、まだ多くの事柄を学ばねばならない時期である。それ故、今まで通りの慎重さと基本に忠実な乗り方を心がけるべきである。

但し、ここまでの段階がよく馬に理解させることができるだけでも相当なものである。概して多くの人達は、ここまでの段階を軽視して先に進みがちである。そのため、後で後悔している例がよくある。そうやって初めて基本の大切さを知るのである。その原因は、馬の調教にこだわり、早くいろいろな課目を馬に教えたがるためである。しかし、馬を前に推進することをせずに課目を教えようとしても、結局馬がその課目を実施でき得るような状態にないため、馬は人間の扶助に従えない。馬が従わないのではなく、従えないのである。もし馬になにかしらさせようとするなら、馬がそれを理解できるような条件

なり体勢を前もって得ることである。それによって、騎手が適確にその扶助を馬に伝えたなら、馬は騎手の意志をまたは扶助を理解して実施するだろう。そのためにも馬をよく前に推進することが大切である。“推進扶助は抑制扶助に勝る”という言葉を出すべきである。

さて、この段階はある意味では本格的な調教段階ということができよう。すなわち、これまでは速歩においては軽速歩を、駈歩においては軽減姿勢または前傾姿勢を多用してきたと思う。なぜなら、若馬の背に対する負重を避けるためである。しかも、騎手の扶助は体重扶助よりも脚扶助を主体としてきた。しかしこれからは、馬にある程度の収縮を求める時期である。この時期になると、脚扶助よりも体重扶助が主体となる騎乗法になってくる。すなわち、体重扶助の中に、より腰扶助（腰の張り）を伴わせて騎手の体重扶助を馬に伝えるのである。脚はもちろん相変わらず使用するが、あくまでも体重扶助を補助するかたちで使用して行くのである。なぜなら、人間の脚力には限度があり、これからの段階においては体重扶助の方が脚扶助以上の効果を与えて行くことができるのである。とはいえ、脚扶助は決して怠らないように注意する。あくまでも、推進扶助は必要不可欠なものである。

今後の作業のための前提条件

1. 訓練段階6点の養成
2. 「Aクラスの馬場経路」の実施が可能
3. 調教開始後、約1年半～2年経る。但し、馬に1. 2が正しく理解されていたなら収縮を求める時期は早めることができる。
4. 馬が健康であること。

この時期においては「収縮運動課目」の訓練がだんだん取り入れられてくる。但し、準備運動時においてよく馬体の柔軟を図り、最終的に前方下方への頭頸の伸展の確認をしておくべきである。馬にこの動作がない場合は馬体の柔軟性が欠けているということである。このような状態で収縮運動を行うことは慎むべきである。決して馬は騎手の扶助を受け入れないだろうし、無理をしてやれば馬はより馬体を硬くして抵抗を示すだろう。馬体の柔軟性の維持と確認の中で、徐々に馬に収縮運動を取り入れていくべきである。また、この時期は収縮運動ばかりではなく、三種の歩法と歩度の改善と向上、半減却扶助および全減却扶助による完全な移行の改善と向上もその目的の中にある。それによってLクラスへと馬の能力を高めていくのである。

Lクラスの馬場経路というと、日馬連制定の経路では「第三課目」がある。または「ジュニア予選課目」もLクラスに入る。このクラスにおいては特に「簡単な駈歩変換」や「反対駈歩」、そして中央線上での規定数の「後退」などがある。その他「後肢旋回」や三種の歩法内での各種歩度が要求される。これらの収縮運動課目を実施するのはこれまで以上に難しく、馬に真直性と透過性が備わっているかどうか

決定的なポイントとなる。特に、馬体の柔軟性と透過性に注意を払って作業を進めるべきである。これらが失われたら馬は抵抗を示すのでくれぐれも判断を誤らないように注意するべきである。

詳しくは、これまで説明してきた事柄のほか、調教の進度を説明している「若馬の初期調教の目標」(P参照)を参考にしてほしい。特に「若馬の初期調教の目標」にはやさしい項目から難しい項目へと段階的に示してあるので、それぞれの馬の状態に応じて判断してほしい。もしも馬の状態が思わしくない場合は、一段階後退してもう一度基本事項を確認してほしい。どんなに段階が進んでも、基本は絶えず大切にしたい。難しい運動や課目になればなる程、基本に忠実に乗っていくことが大切である。また、各種の運動および課目の選択と組み合わせも決定的なポイントである。

このようにしてLクラスの各課目を馬が理解してきたら、「課目」と「課目」をつなげてみる。この時の「課目」と「課目」の移行が特に重要なポイントとなる。ひとつひとつの課目はかなり難しいものである。すなわち、減却扶助操作の正確性をなくしてなめらかな移行は難しいものである。課目にこだわり過ぎないこと。あくまでも馬がよく前へ出ていることを心がけながら、基本に忠実な動作を心がけること。そして自分自身の姿勢は柔らかく保たれているかどうかをよく振り返ってみることである。多くのミスは姿勢の硬さ、すなわち身体全体に余分な力が入り過ぎているために起こる。特に推進を忘れ、拳(手綱)のみの動作が多いのがその最たる原因である。

騎手の身体の硬さは馬の動きを妨げる。そのため騎手は鞍から尻(尻で鞍をたたく)が離れる。そうすると馬は必要以上に急ぐか(背の敏感な馬)、または遅くなって歩かなくなる(背の弱い馬)。そればかりか、そのような騎手は座ることができないため推進は十分に伝えることができず、さらには拳のみの動作(手綱の引きや抑え)になってしまう。これではますます馬は苦痛を感じ、馬体を硬くしてしまう。それをさらにどうにかしようと拍車の使用が多くなる。そうすると、ますます馬は馬体を硬くして抵抗を示す。

このように悪循環になってしまうので、いつの場合でも自分の身体はいつも柔らかく保っているべきで、正確な扶助を伝えることを心がけるべきである。人間が馬上で力を抜くだけで、馬はとてもそれ自体を心地よく感じ、馬体の力を抜いてくるものである。乗馬技術を学ぶことの第一は、自分自身の力を抜くこと。それが馬に対してとても楽さを与えるもとである。ましてや馬を調教しようとする者は、当然これらのことは理解しているべきである。自分自身を振り返ってみることは自分の気持ちを冷静にするのに役立ち、よい判断を得ることにつながる。

さて、このクラスで特に確認すべきことは「簡単な駈歩変換」の課目である。これは収縮駈歩の善し悪

しによって一歩から常歩へ移行ができる。そのためには正しい収縮駢歩の訓練がとても大切である。それによって第一歩から収縮常歩へ移行することが可能になり、また収縮常歩もよく後躯負重を受けているならば、これは次への収縮駢歩発進への準備常歩へとなり得る。

このための練習方法としては、第一に駢歩から常歩への移行の練習をよくやることである。そしてこの際常歩へ移行すると同時に手綱をすみやかに伸ばすことである。このようなやり方を励行することによって、騎手は減却の際決して手綱を引かないことを学び、馬はそれによって騎手の拳に対して信頼をよせる。このことが、この「簡単な駢歩変換」の作業時に大きく影響を与える。

このようにして、あくまでも馬が騎手の扶助または拳に対して抵抗なくハミを受けることによって、徐々に常歩への移行の際に手綱を縮めていくことができ、最終的に収縮常歩への移行または収縮常歩の維持または持続が可能になる。

そのほか、これらの課目と共に「反対駢歩」の課目も重要なポイントである。「反対駢歩」も収縮駢歩が前提であり、特に反対駢歩時においては馬の運動バランスを求められる。そのための収縮駢歩であり、正手前から反对手前、そして再び正手前の収縮駢歩へとその移行がポイントとなってくる。運動バランスがくずれると、馬は急いだり、遅くなったりし、それが馬体の硬さと共に馬の口の抵抗を引き起こす。それをさらに収めようとして騎手は手綱を引いたり、抑えたりするようになり、正しい三節の駢歩から四節の駢歩または不正駢歩になり易くなる。

正しい収縮駢歩の養成のためには正しい尋常駢歩を第一に確認し、その後徐々に歩度を縮めていくべきである。すなわち、尋常歩度と収縮歩度の中間の歩度を求めるべきである。この作業は駢歩ばかりではなく、速歩においても同様である。そのような段階を踏んで徐々に収縮歩度を求めていくべきである。この際、少なくとも騎手は拳で馬の口を引いたり、抑えたりしているような感覚では正しい収縮駢歩の感覚は得られない。いついかなる場合でも、馬は自分の両方の拳に対して柔らかく抵抗なく入ってくるような感覚を感じるべきである。そして、騎手はその馬の口を軽く下から上に感じることである。もちろん、馬によって多少の力の度合いは異なるが、下から上に感じる感覚は必要である。このような動作は決して手綱を引き上げたり、極端に拳を上上げるのではない。このように騎手が感じるということは馬が全面的に騎手の両拳に入ってくる状態である。あとは騎手の座りいかんによって、拳に感じる度合いを調整してあげることができる。この時、馬が正しく収縮しているかどうかの確認法があるが、この動作を間に行って、馬の収縮と自得姿勢の確認をするべきである。この動作が馬に収縮運動を要求していく際に必要な動作であり、馬の収縮状態を正しく判断することにつながる。

また、あまり長時間収縮運動を続けることは馬にとって大きな負担となるので、間に歩度の伸長運動を行う。それによって、馬の前進氣勢と真直性を回復することができる。また、最終的に前方下方への頭頸の伸展を含め、馬の緊張感を取り除くと共に馬体の疲労感を回復する。このようにして馬体の柔軟性と収縮を交互に組み合わせながら馬に収縮を求めていく。それによって徐々に収縮体勢のもとにそれぞれの収縮運動課目を馬は理解していくだろう。

また、この時期は減却扶助が最大のポイントになるので、この動作の確立がとても重要になってくる。減却扶助操作いかんによって馬の収縮と歩度の伸展がより良くなるだろう。また、それらの運動に応じた頭頸の高さ（起揚）も得られるようになるだろう。このような事柄を馬によく理解させることによって、Lクラスの馬場経路はより確実に実施できるようになるだろう。

課目の練習なり経路の練習は、あくまでも基本的な動作を理解している中で行うべきである。決して無理に行わないことである。また、経路の練習はよい状態だったら、週に1回くらいは試してみるのもよい。それによって人馬共に基本と馬の状態の確認をすることができる。また、水勒で正しくハミを受けて運動できるようになったら、大勒（P 参照）で騎乗するのも必要である。それによって馬の騎手の扶助に対する従順性を見極めることができる。よく依倚を得て歩く馬であれば大勒に対して抵抗を示さないだろう。

但し、初めての大勒騎乗時は主に小勒手綱で乗り、その際、大勒手綱は決して強く使わない。その後馬が大勒に慣れ次第、小勒手綱と大勒手綱を均等に保つようにする。それでも決して大勒のみの騎乗は慎み、絶えず小勒手綱を主に受けることを心がける。しかし、大勒騎乗は急ぐことはなく、普段は水勒での騎乗が望ましい。よく調教された馬は水勒騎乗のみで高度な域に到達できる。大勒騎乗は基本的には必ずしも必要としない。但し、大勒での競技参加の場合は、前もって約1カ月ほど前から週に1回程度の大勒騎乗を行って、馬に大勒を慣らしておくことは有効である。しかし、大勒はハミを受けさせるための道具ではないということは何れぐれも理解しておくべきである。あくまでも大勒騎乗は人馬の扶助の正確性と従順性を見極めるものであり、馬がある程度の収縮起揚のもとでの柔らかい依倚を理解していることが前提条件である。

そのほか L クラスにおける主な課目には「後肢旋回」があるが、この運動課目を馬に理解させる場合、初めから小さな旋回を要求せず、初めは直径1 m から 2m 位の半円を描くようにして始める。この時注意すべきことは、両後肢が絶えず前方側方へ踏歩していることである。決して後退させたり、停滞させたりしないことである。これらの多くの原因は推進不足と手綱の引きや抑えにある。あくまでもこれらの課目を行う場合、馬は騎手の扶助に正しく据えられていて可能であり、馬は柔らかい依倚を保っているべきである。課目中に馬の頭または口を強く抑えながらやっているような状態では、正しい課目の

実施は不可能である。馬はいつどんなときでもハミを柔らかく受けているべきであり、馬体を柔らかくしているべきである。

また、特に収縮課目または凶形騎乗を行う場合にはある程度の馬体の収縮度と起揚度を馬の中に感じているべきである。すなわち、そのような運動を実施でき得る運動バランスがとても重要になってくる。運動バランスとは馬が後躯でバランスを受けつつも運動でき得るバランスの獲得である。このような運動バランスは正しく「訓練段階8点」を理解している馬だけが獲得できるものである。このことは、今後の調教において絶えず注目されることであることを騎手は理解しておくべきことである。

ここで訓練段階8点の中の「緊張の緩和」と「透過性」の違いについて説明したいと思う。馬の調教というものは確かに難しいものであるが、決して一部の人にしかできないものではないということ述べてきた。しかし確かな技術と経験と感覚が必要であることはもちろんのこと、同時に調教の原理もよく理解しておくことがさらに大切である。すなわち、我々が馬に乗るということは技術獲得ということには違いないが、これすなわち調教でもあるということをよく認識しておくべきである。馬に多くのことを教えるばかりが調教ではない。高度な馬場や障害を馬に教えることは、ある意味においては専門調教ということができる。しかし、たとえそのような馬の調教であっても、基本はすべて同じであり、その基本を無視したなら、調教を先へ進めても馬は理解しないだろう。また、馬が理解しないばかりか、あとで困るのは人間であろう。しつけの良い健康で従順耳な馬が万人の望むところである。そのためにはいつも馬体の柔軟性に注目するべきである。馬が柔らかいということは、少なくとも心身共にリラックスしているということである。それが騎手の意志を理解し、騎手の扶助を受け入れる最大の要因である。このような状態であれば、少なくとも騎手は乗り易いだろう。これがその時間の前提条件である。馬には一頭一頭、性格や体型や機能の違いがある。また、毎日毎日いつも同じ状態にはあまりない。もちろん、毎日同じ状態または良い状態であることに越したことはないが、しかし、そのような馬はごく少数である。人間と同じように心身に変調をきたすことがある。なぜなら、我々と同じ生き物だからである。すなわち、感情があるのである。だから、毎日毎日馬の状態を良く判断して適確な騎乗をするべきなのである。

このような理由から、第一条件である馬体の柔軟性（緊張の緩和）を図ることが、その時間の第一目標になる。若馬の場合はこれが最大かつ最終目的でもある。しかし、馬体の柔軟性が得られるにつれ、馬は同時にいろいろなことをも理解してくるものである。例えば、馬体がほぐれてくれば方向変換や歩法および歩度の変換も自由自在になる。そうすると、それまでの動きの中により明確な弾発（テンポ）が生まれてくる。これによって真の尋常歩度が確立されてくる。この歩度が馬術的には基本歩度となり、調教の原則でもある。若馬には初めこのような馬術的な基本歩度は出せない。しかし、調教が進むにつ

れ、いわゆる馬術的な基本歩度で動けるようになる。これがその後の調教または運動の基礎となるのである。このことはたとえグランプリ馬であっても同じで、運動の初めと終わりには必ず尋常歩度での騎乗確認をすることが大切である。これを見逃すと馬体の硬さを引き起こしてしまう。なぜなら、高度な運動をし過ぎると、馬の筋肉に偏りと疲労を引き起こしてしまうからである。それゆえ、そのような高度な運動の前後には馬体の柔軟性の養成と確認のための尋常歩度騎乗を行う必要があるのである。また、馬体の柔軟性と依倚の確認のための頭頸の前方下方への伸展は、その尋常歩度騎乗と相まってその作業中に含めることを忘れてはならない。それ故、我々は馬体の柔軟性には最大限の注意を払うべきである。

さて、このようにして馬体の柔軟性が確認されたなら、特に L クラス以上の馬にあっては透過性について注目すべきである。このクラスの馬は軽い収縮運動が要求されるが、これらの収縮運動を実施するためには、単に馬体の柔軟性では不十分で、さらに前後左右の馬体全体の柔軟性と透過性が必要となる。それによって騎手の扶助は全面的に馬に伝わる。いずれかの部分が硬くなっている、または抵抗感があるということは馬に騎手の扶助が全面的に伝わっていないということである。すなわち、馬は騎手の扶助に対して透過していないということである。つまり、口←→項←→背←→後躯の部分が十分に連携していないということである。このような状態での収縮運動は難しい。それ故、我々は馬体の真直性を得るために、今までの基本的な柔軟運動と併せて、馬の前躯を後躯に真っすぐに据えて各種の凶形騎乗または課目を取り入れていくのである。そしてさらには「輪乗りの開閉」運動や肩を内への課目運動などを取り入れて、明確な馬体の真直性を求めていくのである。それによって馬は騎手の扶助を全面的に受け入れるようになる。これが馬に理解されてくるに従い、それなりの収縮度と起揚度が馬体に生じ、収縮運動または課目の実施が可能となる。

このように馬体の柔軟性と透過性の理解は、Lクラス以上の調教において必要不可欠なものであるので、是非注目してほしい。

ここまでが「若馬の調教」に関する主な事柄であるが、詳しくは各項目毎に説明してあるので良く理解して実行してほしい。この項目においては、主に調教に関する手順と注意点、そして調教するうえにおいてのものの考え方について説明している。是非、これらのことを理解して、あなたも馬の調教を試してみてください。

DSTコラムへのご質問・ご感想をお待ちしております。